

★今週の聖句

「もし信じるなら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか」
ヨハネによる福音書 11章 40節

★ ねらい

- ・「神の栄光」について考える。
- ・十字架と復活の位置関係に思いを向けさせる。

★ 説教作成のヒント

- ・闇の中に輝く光がテーマである。
- ・大変長い箇所であり、物語全体をまとめるのもひと苦労あるかもしれないが、そのままをまとめて物語としてお話するのもよいことと思われる。

★ 豆知識

- ・ラテン語では、四旬節は「40 番目」を意味する「クアドラゲシマ」(Quadragesima) という言葉で表されていた。中世後期になって各言語での説教が行われるようになるとともに、四旬節の呼び名も各地の言語に基づいたものに変化していったと考えられる
- ・四旬節は、聖週間（復活祭前の1週間）を準備するものである。

★ 補足

- ▶イエスがラザロを生き返らせた、という有名なお話の一部である。葬儀などでしばしば朗読されるイエスの言葉もここに記されてある。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」(11・25)。
- ▶物語のはじめは「病人がいた」(1節)。それはマルタとマリアの兄弟ラザロであり、イエスにとって、近いものであった。姉妹はイエスに助けを求めますが、イエスは間に合わなかった。それが姉マルタの率直な思いである。マルタはイエスに、「主よ、もしここにいてくださったなら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」(11・21)と落胆を述べているようである。悲しみというより、なじるような非難にも響く。このような悲しみに触れ、イエスもまた「心に憤りを覚える」(33節)。そして「再び憤りを覚えて」、「墓に来られた」。そこでいわれたのが朗読箇所である。「もし信じるなら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか」。
- ▶神の栄光は光の出来事であるに違いないが、陰影は深い。一般的に、栄光とはさん然とかがやく様を思い浮かべるものであろうが、ヨハネ福音書の栄光はどちらかという墨絵や切り絵、銅版画などによって表現されるにふさわしい「輝き」のイメージである。
- ▶四旬節を迎えてのこの福音書朗読となっている。CSでも日課に沿っているところでは、すでにひと月以上、イエスのご受難と死をめぐる御言葉を聞いてきたはずである。ラザロの話も、イエスの十字架の話も、劇的なドラマとして話すにせよ、その陰影を子どもと一緒に味わいたい。日課の意図は、十字架と復活の位置関係に思いを向けさせる。復活は十字架にかけられたものの復活である。光は闇の中でともされたのである。それは危機一髪、栄光に向かう

物語ではなく、危機の中に灯された光の物語である。「信じる」というのは、その危機一聞一死に宿る神の救いの物語である。

◇説教

「あるところに病人がいました」。この人のお名前はラザロさんと言いました。三人兄弟の末っ子です。上にお姉さんが二人いて、マルタさんとマリアさんというお名前でした。ラザロさんはとても重いご病気になり、お姉さんのマルタさんとマリアさんもとても心配していました。そこで「イエスさまなら、何とかしてくださるに違いない」。そう思ってイエスさまに助けを求めました。でも、イエスさまは間に合いませんでした。どうして間に合わなかったのか分かりません。マルタさんはイエスさまに向かって、「イエスさま。もしここにいてくださったなら、ラザロは死ななかつたでしょう」（11・21）と、悲しみというより、なじるような気持ちでいいました。

イエスさまは、言い訳をされませんでした。そのかわり、こんなことをおっしゃいました。「もし信じるなら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか」。とても不思議で難しい言葉だなと思います。マルタさんもイエスさまも、そして周りにいた人たちも大切なラザロさんが亡くなったのでとても悲しいときだったからです。でも、マルタさんはイエスさまがそうおっしゃってすぐに、「あっ、私はイエスさまを信じているんだ。神さまはここで共にいてくださるに違いない」と思いました。このときイエスさまがおっしゃったことをとてもよく分かると言った人がいます。

その人は、山浦先生といって、東北の気仙沼というところでお医者さんをされている方です。実はあの大きな地震・津波のときに大きな被害にあわれました。とってもつらくて悲しい体験だったのですが、そんな中でイエスさまのお言葉を思い出します。今朝のマルタさんと似ていたのかもしれませんが、津波のあと、寒い日に悲しんで外に立ちつくしているとき、ふとイエスさまの声が聞こえたように思いました。こんなお声だったとおっしゃっています。「おい、元気をだせ、この生き死め。この俺は死んでもまた立ち上がったのだぞ。その俺がついているんだ。さあ、涙をふけ。勇気をだして、いっしょにまた立ち上がろう。お前のやるべきことが、そら、見えるだろう」。

イエスさまが「神様の栄光を見る」というのはこういうことなんじゃないかと思います。栄光というのは、こうしてとても悲しいことやとても大変な目にあったときに、イエスさまが「わたしを信じているか。神の栄光を見るといったではないか」とおっしゃるのは、そこにイエスさまが私たちと共にいてくださる。丁度ラザロさんが亡くなったとき、とてもつらくて悲しくて腹立たしい思いをするようなとき、イエスさまが近づいて、元気をだせ。神様は、私があなたというように、共にいてくださるのだ、そう言ってくださるのではないかと思います。

★分級への展開

さんびしよう

*讃美歌は”こどもさんびか”（日キ版）より

□114番

□改訂119番

やってみよう

ペープサート（イエス様、マルタ、マリア、ラザロ）で演じる

解説：ベタニア村にお姉さんのマルタ、妹のマリアと一番下に弟のラザロの3人兄妹が仲良く暮らしていました。イエス様はエルサレムに来られるときは、たいていこのベタニア村の兄妹たちの家に泊まられました。

マルタ：私は家の中の仕事が好き、イエス様がおいでになったらおいしいごちそうをつくりましょう。

マリア：私はイエス様のお話を聞くのが大好き、まだイエス様たち、この村に来られないかなあ。

ラザロ：僕はお姉さんたちの手伝い、お庭の手入れや力仕事をしています。

解説：ラザロが病気になり、だんだん悪くなり、使いの人をやってイエス様に話してくださいとお願いする。イエス様はベタニアから遠い所に行っておられたのでベタニアにお着きになったときは、ラザロはもう亡くなっていました。

（イエス様登場）

マルタ・マリア：イエス様がいらしてくださったなら私たちの弟ラザロは死ななかつたでしょうに。

解説：イエス様は涙を流された。

イエス様：もし、信じるなら、神さまの栄光を見られると言っておいたではありませんか。神さま、私の願いを聞き入れてくださって感謝します。人々に神さまが私をこの世にお遣わしになられたことを信じさせるためです。

（大声で）ラザロ、出てきなさい。

ラザロ：（起き上がる）

解説：ラザロは立って出てきました。マルタもマリアも大喜びでイエス様にお礼を申しました。イエス様はわたしたち一人ひとりを愛してくださっています。そして死んでしまったラザロさんはもう一度生きかえることができました。

話してみよう

- ・今までにものすごく悲しい事ってあった？
- ・その時は、どんな風にしたら解決できたかな？
- ・そういう時、お祈りすると悲しさは薄れる？

★今週の聖句

| | |
|------------------------------------|-----------------|
| 「ダビデの子にホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように」 | マタイによる福音書 21章9節 |
|------------------------------------|-----------------|

★ ねらい

- ・希望の到来を迎えるものとなる。
- ・イエス様を喜んでお迎えする準備をする。

★ 説教作成のヒント

- ・ルターはこの箇所から「あなたの王があなたのもとに来られ、あなたの内ではじめられる・・・あなたがたがイエスを捜すのではなく、イエスがあなたがたを捜すのだ」と言ったといえます。救い主が私たちのもとへ。希望は自らが造りだすものではなく、到来するものであることを聖書は伝えている。その希望の到来を迎えるものになりたい。

★ 豆知識

- ・群衆がイエス様をナツメヤシ（棕櫚）の枝（植物学的には葉）を路に敷き、また手にとって迎えたことを記念する日。

★ 補足

- ▶ダビデの子・・・ダビデはイスラエル第二代の王。エッサイの末子で少年時代は牧童。後にペリシテの巨人ゴリアトを倒した話は有名。神さまを深く信頼し、優れた王として記憶され、後世において理想的な君主として仰がれていた。イエスさまの時代、「ダビデの町」といわれていたのがベツレヘム。つまりベツレヘムで生れたイエスさまは「ダビデの子孫」であり、同時にダビデにまつわる素晴らしい部分を継承して来られた「王」として迎えられている。「主の名」とはその素晴らしい部分でもとりわけ、ダビデが神さまによって王として立てられたように、イエスさまも神様の御心の成就として来られたことを示す。ダビデの生涯についてはサムエル記上16-列王記上2章、歴代誌上11-29章を参照。
- ▶「ホサナ」・・・「おお！ 救いたまえ」の意。イエスさまを迎えるときの歓呼の叫びとして用いられている。ちなみに日課の少し後、21・15でもう一度、「ホサナ」は叫ばれている。こちらは神殿で子ども達が叫んでいる。イエス様を嫌った祭司長たちがこれを聞いて腹を立てた話も興味深い。イエスさまはこのとき、彼らに詩編を引用して答えておられる。イエスさまを迎える歓呼の叫びを止めることはできない。

◇説教

あるところに事故にあって入院した男の子がいました。その男の子はひどいやけどを負って、「どうせ僕は助からないんだ」と思っていました。とてもつらい思いをしていたんだと思います。人に親切にされたり、慰められることにも素直になれませんでした。病院で治療を受けることも、リハビリをすることも大嫌いでした。だから一生懸命、治療しようとする病院の人た

ちも、おうちの人たちも困っていました。そうして毎日がただ過ぎて、ずいぶん学校にも行けないでいた頃、不思議なことが起こりました。

学校の先生が心配して、男の子の病室を訪ねていったのです。実は先生はご両親に頼まれて、その子のところに少しでも勉強を教えてほしいと頼まれていたのです。大好きだった学校のお勉強をしたら、男の子も気持ちが変わるかもしれないと思ったからでした。ところが病室に入って男の子と会ったとき、男の子がとてつらくて痛々しい様子だったので、先生は何もできずに帰ってしまわれたそうです。先生はご両親との約束も果たせずに残念に思っていました。ところが数日後、おうちの人から連絡がありました。「先生、あの子に何をされたんですか」。先生が訪ねた翌日から、男の子の態度が一変したというのです。長いことしぶっていた治療やリハビリを進んでするようになります。そうしてけがも良くなって、いよいよ退院して学校に通えるようになったころ、その男の子はどうしてその日以来、がんばるようになったのか話してくれました。先生が自分のところを訪ねてくれるまで、希望がなかったそうです。先生が来てくれた、という単純な事実でこう思ったそうです。「もし僕が本当に助からないなら、先生は勉強を教えようなんて、思わないだろう」。

私たちは、希望は自分の心の中にあると思っています。時々それが見当たらず、元気がでなくなったり、悲しい思いをします。でも、このお話は、希望はプレゼントみたいに、思いがけず与えられるものであると教えてくれます。きっと先生は、自分は男の子に十分なことをしてあげられなかったことを残念に思ったにちがいません。でも男の子の方には、先生が来てくれたこと自体が希望になっていたのです。

今日の聖書のお話は、イエスさまがエルサレムに来られたことを大勢の人たちが「ホサナ」といって喜び叫んだというお話です。「ダビデの子、ホサナ」というのは、この人たちが待ちに待った、それは大昔から神さまが人々に与えてくださった約束が「本当だったんだ」という喜びの叫びです。ホサナとというのは、讃美歌の歌詞にもあるとおり、神さまを讃美するときの喜びの言葉です。イエスさまが、ただただ、私たちのうちに来てくださることがどんなに心強く、また希望があることなのかをこの人たちは伝えてくれています。もし私たちの心がとっても暗くなり、希望もなく、痛々しい思いになったとき、この聖書のお話はとっても大切なことを伝えてくれています。イエスさまの方が私たちに近い、希望となってくくださるので。そのときは、私たちも「ホサナ」といって、神さまの恵みを喜ぶのではないのでしょうか。

★分級への展開

さんびしよう

*讃美歌は”こどもさんびか”（日キ版）より

70番

改訂82番

やってみよう

・絵本をよもう

「むねあかどり」（ラーゲルレーヴ／作、中村妙子／文、高瀬ユリ／絵、日本基督教団出版局）この絵本は「キリスト伝説集」の中の「ムネアカドリ」にもとづくものです。今の時期にピッタリの絵本です。

・折り紙のキリスト



作り方は『CS こんなアイデアいかがですか？知っておこう新約聖書』（石橋えり子著、日本基督教団出版局）に掲載されています。

*子どもが作るのには少々難しいです。折り紙よりもA4などの大きな薄い紙を使うと作りやすいです。



話してみよう

・希望ってなんだろう？希望がなくなるって、どんな感じ？自分にとって、どんなことが希望かな？将来の希望は？学校での希望は？友達との間では？

・イースターまでの1週間、イエス様の苦しみを覚えて、何かやってみよう。

例) ・好きなものをひとつ我慢してみる。

・いつもより長く祈りをする。

・イエス様がどんなふうにして十字架につけられたかを、毎日おもいだす。

等

★今週の聖句

「婦人よ、なぜ泣いているのか。誰を捜しているのか」

ヨハネによる福音書 20章 15節

★ ねらい

- ・復活は、どの人も救う約束ということ学ぶ。
- ・復活（喪失から希望へ）の体験を、身近な例から共感する。

★ 説教作成のヒント

- ・泣いている人に寄り添う視点から、復活を考えてもよい。

★ 豆知識

- ・春分を計算の基点にし、その春分後の最初の満月を探し、そしてその満月の後の最初の日曜日が復活祭となる。
- ・「復活祭」という言葉は、ギリシャ語の「パスカ（Π?σχα）」に由来しており、その言葉も元をたどればユダヤ教の「過越（すぎこし）の祭り」を表す「ペサー」（Pesach）という言葉から出ている。これはキリスト教の復活祭がユダヤ教の「過越の祭り」から生まれた祝い日であることを示している。

★ 補足

- ▶日課は復活物語の一場面。「婦人よ」とは、マグダラのマリアのこと。復活の記事は各書簡に違いが見られるが、ヨハネでは、このマリアが墓を訪れたことになっている。マリアは墓の外に立っていた。最初に話しかけるのは「白い衣を着た二人の天使」である。そして復活のイエスもマリアの傍に立たれ、おっしゃったのが今朝の御言葉である。「婦人よ、なぜ泣いているのか。誰を捜しているのか」。復活顕現の物語は、信仰の中核に位置するが、お話をする際、このような場面に基づいていることを考えてみたい。泣いて途方にくれるものが、最初の復活顕現に出会っている意義は、意外と計り知れない意味を持っているように思われる。
- ▶あるいは、復活のイエスの最初の一声にも注目したい。「私は復活したぞ」でもなく、「私は死に勝利した」でもなく、ましては「私は永遠の命だ」とも言われていません。あくまでも静かなたたずまいの中、涙を流し途方にくれるマリアに寄り添うかのような言葉です。「婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか」。それはあたかも迷子の子どもに話しかける道行く親切な人の声に似ている。その寄り添いの平凡さに、マリアは園丁だと勘違いをする。この勘違いにもまた、子供と共に復活信仰を考え、あるいは思いをめぐらすキーワードになるかもしれない。実際、迷子のように泣きじゃくるほかないものところの傍らにイエスは立ち、宣言される。それは大音量の宣言ではなく、ささやくような落ち着いた声であったと想像する。復活は説明ではなく、その生きた場面において、しかもまさに見失った

と泣いて途方に暮れ、あるいは勘違いをするその場面において、背後に立たれ、呼びかける声を通して、マリアは復活体験をするのである。

◇説教

(卵探しをするとき)。イースターおめでとうございます。イースターの卵さがしはとても楽しいですね。意外なところにあるのを見つけると、とってもうれしいです。イースターはイエスさまが復活なさった日を記念して、お祝いする日です。とってもうれしくて楽しい日なのですが、最初のイースターはどんなだったのでしょ。それが今朝の御言葉です。

最初のイースターには意外性があります。どこの教会でもイースターおめでとうというて教会に集まります。エッグ・ハンティングをしたり、きれいなお洋服を着たり、おいしいお食事をいただいたりします。2000年間も、どこの教会でもしているのです。でも、最初のイースターは、泣いている人が登場人物です。

「婦人よ」と言われていたのは、マグダラのマリアさんでした。聖書をよく読むと、このマリアさんはイエスさまのことが大好きな人だったことが分かります。どうして泣いているのかというと、イエスさまが十字架に架かれて死なれたので、お墓に行っていたのです。その頃のお墓は大きな洞穴みたいなところに亡骸をおさめて、大きな岩でふたをしていたといいます。とっても大きな岩なのに、それが動かされていて、イエスさまがおられない。悲しいやら、驚くやら、マリアさんはどうしていいか分からずに泣いていたのではないかと思います。このマリアさんにイエスさまは「どうして泣いているんですか」とお声をかけられます。これがマリアさんにとって、復活のイエスさまからいただいた最初のお言葉です。

みなさんは迷子になったことがありますか。【わたしは】あります。小学3年生の頃、大きな遊園地にお母さんに連れていってもらいました。とっても楽しい一日になるはずだったのに、勝手なことをして迷子になってしまいました。もうお兄さんのつもりでしたから、誰かに助けを求めるのも恥ずかしいと思って、自分でお母さんを捜そうと何時間も歩いてまわりました。迷子になったら、本当はうろうろしてはいけないんだけど、ずっとうろうろしていました。だからお母さんが一生懸命探しているのに、迷子の方もうろうろしているので、いつまでたっても見つかりませんでした。何時間もたって、くたくたになって流した涙もかかれたころ、ようやくお母さんがやっと見つけてくれました。その時お母さんが最初にいった言葉は、「あんた、何してんの！」でした。とっても叱られました。とっても叱られましたが、とっても安心して嬉しかったことを今でもよく覚えています。

このとき泣いていたマリアさんも、このときの迷子のように泣いていたんだと想像します。大好きなイエスさまともう会えない悲しみもありましたし、お墓にいても会えないので、どうしてよいか途方に暮れて泣いていたのだと思います。イエスさまはそのマリアさんの傍になってお声をかけられたのがこのセリフです。「どうして泣いているのですか」。マリアさんは、まだ泣いていたかもしれませんが、とっても安心して喜んだと思います。イエスさまの方が、マリアさんに近づいて、お声をかけてくださったのです。イエスさまの復活は、神さまの恵みの出来事です。マリアさんだけでなく、イエスさまを信じるみんなへの約束になっています。イエスさまはどんなことがあっても、何があっても、みんなを放っておかれない、という約束です。だからイースター、おめでとう、なのです。

★分級への展開

さんびしよう

*讚美歌は”こどもさんびか”（日キ版）より

4 1 番

改訂 8 6 番

やってみよう

- ・ゲーム「イースターおめでとう」

フルーツバスケットの変形です。みんなでたまごになりましょう。スペースがあればすぐにできます。

<やりかた>

- ① オニの役を 1 人決め、残り的人たちは 3 人組になり、1 人を中に入れ（黄身）、2 人が外側から両手をつなぐ（白身）。
- ② オニが「黄身」と言ったら、黄身の人は白身から出て別の白身の中に移動する。オニもすばやくどこかの白身の中に入る。入るところがなくなってしまった人が次のオニになる。
- ③ オニが「白身」と言ったら、白身の二人は手を離してそれぞれ別の黄身のところへ行き、別の人と 2 人で白身になる。
- ④ オニが「イースターおめでとう」と言ったら、全員バラバラになり黄身も白身も関係なく新しい 3 人組をつくる。
- ⑤ 余った人が新しいオニになりゲームを進める。

話してみよう

・今年もイースターがやってきたね！イースターでの思い出は？イースターって、自分にとって、どういう意味がある？

・

・先週イースターに向けて何かやった人は、その体験を皆に伝えてみよう！

★今週の聖句

「あなたがたに平和があるように」

ヨハネによる福音書 20章19節

★ねらい

- ・復活のイエスが日常の私たちと共に歩む主であることを考えさせる。
- ・日常ではない場面で日常の言葉を用いられたイエスに救いを見る。

★説教作成のヒント

- ・復活後の第一主日、復活顕現に際して、イエスがこの言葉をおっしゃった意味を思いめぐらしたい。それは日常性にある神の恵みの体験を思わせるものであるからだ。

★豆知識

・ヘブライ語で「平和」を意味する言葉。ヘブライ語の挨拶のひとつでもあり、日本語の「こんにちは」に相当する。シャーローム・アレーヘム（返すときはアレーヘム・シャーローム）は別れの挨拶であり、安息日の夜に歌われるピーユートの名称でもある。

- ・以下のような意味が含まれる豊かな挨拶。

- (1) 平和（対国、対神、対人）…和平、和解
- (2) 平安（個人的）…平穩、無事、安心、安全
- (3) 繁栄（商業的）
- (4) 健康（肉体的、精神的）…健全、成熟
- (5) 充足（生命的）…満足、生きる意欲
- (6) 知恵（学問的）…悟り、靈的開眼
- (7) 救い（宗教的）…暗闇から愛の支配へ
- (8) 勝利（究極的）…罪と世に対する勝利

★補足

- ▶平和があるようには、イエスさまの時代の日常のあいさつ言葉。わたしたちなら、「こんにちは」とか「やあ」に相当する。この「平和があるように」とは、その後のキリスト教界にとっても、信仰の理解の上でも、信仰生活でも絶大な意味を帯びるようになった。
- ▶教会暦は長い四旬節をおえて、復活祭を迎えた。いずれの教会でも喜びを共にした翌週である。福音書は復活の後について話している。それは復活のイエスが日常の私たちと共に歩む主であることを考えさせる。私たちにとって、このときのイエスを肉眼で見ることはない。「見ないで信じる信仰」は奇跡的なことであり、同時に日常的なことでもありうる。イエスのご臨在を想う鍵は、「あなたがたに平和があるように」という言葉をイエスがここで用いられた設定にある。日常ではない場面で日常の言葉を用いられたイエスに救いを見るような思いである。

★説教

イエスさまは町や村をまわって神様のお話をしておられました。とても素晴らしいお話だったので、イエスさまが来ると「イエスさまが来たぞ」といってたくさんの人たちがイエスさまの

ところに集まってきていました。でも、イエスさまの教えを聞きたくないと思っていた人たちもいました。悪い思いがむくむくと膨らんでイエスさまを十字架にかけてしまいました。イエスさまのお弟子さんたちはイエスさまのことが大好きでしたから、とても悲しんでいました。悲しいだけではなくて、イエスさまを十字架にかけた人たちが自分たちに酷いことをするのはないかと心配して、家の中に鍵をして息をひそめていました。イエスさまがこれまでお弟子さんたちに、「私は復活します」と何度もいわれていたのだけれども、このとき、お弟子さんたちはすっかり忘れていたのだと思います。家に鍵をして、怖く怖くて仕方がなかったのかもしれない。

そこへイエスさまがお部屋に入ってこられました。とても不思議なことが起こりました。家に鍵をして、だれも入ってこられないようにしていたのに、イエスさまはお入りになったからです。それだけではありません。もう会えないと思っていたイエスさまが、自分たちのところに来てくださったから、お弟子さんたちはうれしいやら、驚くやら、このときのことを想像すると、大変な騒ぎだったんじゃないかと思えます。

そこでイエスさまがおっしゃたお言葉は、「あなたがたに平和があるように」でした。とても素敵な言葉だと思います。イエスさまの時代の言葉では、「シャローム」という言葉だったそうです。挨拶の言葉だったのです。「こんにちは」とか「やあ、元気」といったように私たちが普段から使っている言葉です。想像してみてください。お弟子さんたちは、部屋に鍵をして、怖くてこわくて仕方がないときだったので、すぐにイエスさまとわからなかったのかもしれない。イエスさまが「私は復活します」とおっしゃったこともすぐには思い出せなかったのだと思います。でも、この言葉を聞いて、「ああ、イエスさまだ」と我に返ったのではないかと思えます。

<わたしも>その昔、大切なお友達がいて、ご病気で突然なくなったことがあります。ずいぶん前のことですが、お友達が私と別れるときいつも言ってくれていた「ばいばい」とお別れのあいさつをしてくれた時のことをよく覚えています。優しいお顔でした。これは不思議なことなのだけれども、普段はそのお友達とおしゃべりしたときの内容や、一緒にしたことなど思い出すことはありません。でも、時々お友達がお挨拶してくれたときの一場面が思い出されることがあります。そのときは、そのお友達と過ごしたいろんな思い出がよみがえり、お友達がとっても近くにいるような気持ちになり、心が温かくなります。もしかしたら、この時のお弟子さんたちも同じような体験だったのかもしれない、と思います。これまでイエスさまが数知れないほど、お弟子さんたちと交わされた「シャローム」という挨拶は、ただイエスさまを思い出ただけでなく、それまでイエスさまが教えてくださった大切なことも思い出したはずで。

このとき、お弟子さんたちは、実は家の戸に鍵をしていただけではありませんでした。心にも鍵がかけられていたんだと思います。とてもつらいことがあったり、嫌なことがつづくと、もう誰の言うことも聞きたくない。会いたくない。そういうときがあります。でも、イエスさまはそういう私たちの心に来てくださって、「あなたがたに平和があるように」とお声をかけてくださいます。これからもイエスさまと一緒に歩んでゆきたいと思えます。

★分級への展開

さんびしよう

*讚美歌は”こどもさんびか”（日キ版）より

40番

改訂34番

やってみよう

・十字架にかけられ苦しまれ亡くなられたのに弟子たちは何もせずに逃げて自分たちもとらえられるのでは、と恐れて鍵をかけていた。

★弟子たちの気持ちを考えてみよう。どんな気持ちで過ごしていたのだろう。

・イエス様の御心（十字架上の言葉）

ルカ 23：34 「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているか知らないのです。」

マタイ 27：46 大声で「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」

★イエス様のみ心を、十字架の上での言葉から考えてみよう。

復活され弟子たちに話された言葉から考えてみよう。「あなたがたに平和があるように」

話してみよう

・シャロームの気持ちを伝えたいかな、今一番仲の良い友達のことを皆に話してみよう。どこで知り合ったか、どんな時に一緒にいるか。どんなことを話すか、一緒にするか。

・世界中がもっと平和になるように、世界のどんな人にシャローム（平和）を伝えたいか、話し合ってみよう。